



TITLE:

<大會抄録>クブラウィーヤの「成立」

AUTHOR(S):

矢島, 洋一

CITATION:

矢島, 洋一. <大會抄録>クブラウィーヤの「成立」. 東洋史研究 2002, 61(3): 491-491

ISSUE DATE:

2002-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155435>

RIGHT:

明末清初には、文人と妓女との親密な交流が見られた。その意味では、冒襄、余懷の二人は、明末風流文人たちの繼承者たるに過ぎない。しかしながら、明清の鼎革を経ることによって、明末の女性たちは、輝かしき明の世の象徴としての意味をも負うようになった。本報告では、冒襄と余懷の交遊、『影梅庵憶語』の流通と讀者の反應などの材料をもとに、清初「東南故老遺民」にとつての「風流餘韻」の意味をさぐってみることにしたい。

クブラウィーヤの「成立」

矢 島 洋 一

タリーカを單純にスーフィー教團と捉える理解は現在修正されつつある。しかし、タリーカとは何か、具體的には、一つのタリーカの範圍はどこまでか、スーフィーがあるタリーカに歸屬するということは如何なる意味を持つのか、何をもつて一つのタリーカの成立と見なすことができるのか、といったタリーカの存在形態を巡る基本的な問題についての共通認識は未だ確立されていない。タリーカはイスラーム世界史において重要な役割を擔ってきたと言われるが、その機能面を理解するためには形態面の理解が不可欠の前提である。

そこで本報告では、一三世紀に中央アジアのスーフィー、ナジュムッディーン・クブラーによって創設されたとされるクブラウィーヤを例に、タリーカの「成立」の意味について検討する。特

に一三・一四世紀における初期クブラウィーヤのスーフィーたちの著作や活動の分析によって、クブラウィーヤの道統、教義、人的組織、歸屬意識、他者の認識の各側面におけるクブラウィーヤの「成立」の意味を検討し、それらを總合することでタリーカの存在形態を理解するためのモデルを提示したい。

イスラム化に伴う暦・交易・巡禮儀禮の變遷

——七世紀のアラブ社會——

醫 王 秀 行

預言者ムハンマドがメッカを征服(A. H. 8)し、別離の巡禮(A. H. 10)を終えるまでのごく短い期間に、その後のイスラム社會のあり方を決定づける規定が數多く作られた。暦、巡禮儀式、そして巡禮時における交易のあり方も一變した。

暦は従來の太陰太陽暦から純粹な太陰暦へと改變され、これによってアラビア半島の巡禮システムは一變し、メッカのみが巡禮地としての機能を持つことになった。神聖月の規定も改められ、多神教徒に神聖月の禁忌は適用されなくなった。イスラム化が進行する中、部族檜の秩序を支えていた神聖月の持つ意味も歴史的に變化した。

ハッジはもともメッカへの巡禮ではなく、ヒジャーズ地域の部族集團が主催した、メッカ東方の谷間における祭禮であつた。メッカのクライシュ族はこれに参加する一部族にすぎなかったが、